

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22530769

研究課題名(和文) 包括的な解離傾向尺度の開発

研究課題名(英文) Development of the scale of Comprehensive Dissociation Scales

研究代表者

福井 義一 (Fukui, Yoshikazu)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：20368400

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、包括的な解離傾向を測定する尺度を開発することであった。青年期の健全な群を対象に大規模調査を行った結果、解離傾向の諸側面を多面的に把握できる尺度が開発され、一定の信頼性と妥当性が確認された。

その過程で、解離と類似概念の違いについても検討され、解離傾向の基盤とされる被虐待経験のような反復性のトラウマや、不安定な愛着スタイルとの関連についても検討され、一定のモデル化がなされた。これらの成果については、多くの学会で発表され、そのうちのいくつかは論文化された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop the scales which can measure the dissociative tendency comprehensively. The result of the research for the healthy adolescent population, the scales which can measure the several dimension of dissociation was developed, and to some extent the reliability and the validity was confirmed.

In this process, the differences between dissociation and the closely-related construct was reviewed and the relationships with the basis of dissociation involving the experience of child abuse and insecure attachment. Finally, models were proposed.

Our outcomes were presented in a lot of conferences and some of them were published as papers.

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：解離傾向 心的外傷 尺度開発

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究開始当初は、解離概念について研究者間や臨床家間で混乱が生じていた。当時、解離を測定する目的で最も広く使用されている **Dissociative Experiences Scale** (以後、**DES**) は、基本的には精神的解離症状の中でも、最も重篤な解離性同一性障害をスクリーニングする目的で開発されたことから、精神的解離現象の全ての側面をカバーできていないという問題があった。また、因子分析研究から、解離傾向は質的に異なる複数の下位因子から構成される概念であることが指摘されてきたこと、精神面だけではなく、身体表現性解離という概念が提唱され、心身の解離傾向を把握する必要が認識されてきたことなどが、研究開始当初の問題として挙げられていた。

(2) さらに、筆者は、**EMDR** (眼球運動による脱感作と再処理法) という技法を用いたトラウマ関連障害の治療において、**DES** を用いて解離性障害の併発をスクリーニングしてきたが、そのカットオフポイントを下回る (すなわち解離性障害ではないと見なされる) 事例においてすら、治療過程において様々な解離症状が出現し、「解離」を上手く取り扱わないと治療が進展しない場面に数多く出会ってきた。そのため、研究面でも臨床実践面でも、解離傾向をより詳細かつ包括的に捉える尺度の開発し、臨床実践におけるアセスメントに活用できるようにすることが急務であった。

### 2. 研究の目的

本研究は、包括的な解離傾向を測定する尺度の開発を目的としていた。近年、トラウマ関連障害や解離性障害、身体表現性障害と言った解離機制を背景に持つ疾患単位に注目が集まっており、様々な立場から解離機制について論じられてきた。

しかしながら、解離概念の定義は、研究者間や臨床家間、あるいは相互間で混乱が見られ、解離機制と解離症状、解離症状に対処しようとするクライアントの行動の識別がなされていない。さらに、現在標準化されて用いられている解離傾向を測定する尺度は、精神的解離傾向の中でも病理的な解離傾向に重点を置いて測定しており、解離傾向の様々な側面を包括的に捉えることができない。よって、様々な側面から解離傾向を把握することが可能な包括的な解離傾向を測定する尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討し、標準化することを目的とした。

### 3. 研究の方法

(1) 既に複数回にわたる調査から得られた大規模データを用いて、解離傾向と様々な近縁概念との関連を検討して解離概念の整理と精緻化を行った。

(2) (1) のデータセットを用いて、解離の成因であると考えられる虐待的な養育環境と不安定愛着との関連について検討し、モデル化した

(3) 解離傾向が高い者の特徴を把握するために、既の実施した調査データと投影法の一つであるロールシャッハ・テストを施行したデータを組み合わせて、解離のロールシャッハ指標を検討した。

(4) 先行研究や臨床実践の中から解離に特有の主観的な体験を抽出し、青年期アナログ群を対象に質問紙調査を実施し、包括的な解離尺度を作成した。

### 4. 研究成果

(1) 解離傾向と様々な近縁概念との関連について検討した結果、催眠概念やとの違い (論文①, 学会発表⑨, ⑳), アレキシサイミアとの異同 (論文②), 身体表現性解離との関連 (論文②, 学会発表③, ⑩, ⑬, ⑯, ⑰, ㉑) などが明らかになり、精神的解離傾向の範囲と概念がより精緻化されたと言える。

(2) 解離の成因であることが想定されている、虐待的養育環境と不安定愛着の影響について検討した。

前者については、虐待的養育環境が心身の解離傾向やアレキシサイミア傾向、心身の自覚症状に及ぼす影響について検討し、虐待と解離が共存する群とそうした背景要因を持たない群があることが分かった (論文②)。

また、後者について、成人愛着スタイルとの関連からは不安定愛着が高解離傾向と共存しており、特に恐れ-回避型と呼ばれる最も組織化されていない愛着型が解離傾向の高さと関連することが示唆された (論文③)。これらの成果を元に、解離性障害に対する催眠を用いた治療において、愛着修復的要素を織り込むことの重要性を示唆できた (論文①)。このことは、本研究にから、臨床に還元できる大きな成果として位置づけることができる。

それ以外にも、虐待的養育環境と成人愛着スタイルの両者を含めて、心身の解離傾向との関連を検討したり (学会発表㉒, ㉓), 虐待的養育環境との関連をさらに精緻に検討したり (学会発表⑤, ⑬), 解離は非常に高い不安に対する一種の防衛として機能するという観点から、不安感受性との関連を検討したりした (学会発表⑪, ⑮) 中から、解離性障害の成因についてさらなる知見が蓄積できた。総じて、解離傾向は、いずれの要因とも直線的な因果関係の値は低く、クラスター分析などを用いることで、虐待的養育環境と愛着の内的ワーキングモデルの特定の組み合わせが解離の重症化に対して重要であることが分かった。

(3) 解離傾向が高い者の特徴を把握するために、既に実施した調査データを用いて、解離のロールシャッハ指標を検討した結果、いくつかの解離のロールシャッハ指標が抽出され、そこから高解離者の認知構造や体験様式が推測できた(学会発表⑫, ⑬, ⑭, ⑮)。特に、ロールシャッハ指標には性別と解離傾向の高低の交互作用が見られ、女性の高解離者では華々しい症状化を反映して多くの反応の出現頻度が増えたのに対して、男性の高解離者はほとんどの反応の出現頻度が低下し、ある種の反応停止状態にあることが示唆された(学会発表⑫)。

これにより、従来の解離のロールシャッハ指標は主として女性において当てはまりがいいが、男性については弁別力がないことが判別分析の結果から示唆された。このことは、これまで症例報告が少ないため、解明が進んでいなかった男性の解離性障害の特徴や、そのメカニズムの解明においても、重要な貢献であると思われる。

(4) 本研究の中核となる新しい包括的な解離傾向尺度の開発について、まずは先行研究や臨床実践の中から解離に特有の主観的な体験を抽出し、青年期アナログ群を対象に予備的な調査を実施した。その結果、鏡恐怖のような鏡像体験(学会発表⑯)、特有の夢見体験(学会発表⑱)、気配過敏症状(学会発表⑲)、セネストパチーと称される身体感覚異常(学会発表⑩)と解離傾向の間の関連が示唆された。これらの知見に加え、さらに多くの先行研究や臨床実践から、他項目の尺度を作成し、健常群を対象に大規模な質問紙調査を行うことで、包括的な解離傾向尺度を開発した(学会発表⑥, ⑧)。本尺度は、65項目からなり、「I: 離人と現実感喪失」、「II: 気配・対人過敏」、「III: 能動的夢体験」、「IV: 身体感覚異常」、「V: 解離性幻覚」、「VI: 鏡恐怖、VII: 夢うつ体験」という7つの下位尺度を持っている。それぞれ高解離傾向者において体験頻度が多くなることが分かっている。本尺度については、高い内的整合性と基準関連妥当性が示された(学会発表⑧)が、一部の下位尺度において再検査信頼性が低かった(学会発表⑥)ため、今後は再検査信頼性について更なる検討が必要である。さらに、現在は35項目からなる本尺度の短縮版を作成し(学会発表②)、臨床におけるアセスメントや大規模調査において使用しやすさを高めた。それらを用いて、解離傾向を質的に異なる多要因から把握することの有効性について、検討を行っているところである。(学会発表①, ②)

また、これらの研究から、従来の解離性を測定する尺度の問題点を指摘したり、専門家を対象に正しい使い方について啓蒙できる機会が得られた(学会発表④, ⑳, ㉑)こと

も本研究から得られた、特筆すべき成果であると言える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

- ① 福井 義一, 催眠の解離性障害に対する有効性—結局、解離とは何なのか?—, 臨床催眠学, 査読有, 11巻, 2011, 33-41
- ② 福井 義一, 野村 早也佳, 小澤 幸世, 田辺 肇, 虐待的養育環境と心身の解離傾向, アレキシサイミア傾向及び心身の健康の関連, 感情心理学研究, 査読有, 18巻第1号, 2010, 25-32
- ③ 福井 義一, 成人愛着スタイルと解離性体験, 及び心理的健康の関連, 催眠学研究, 査読有, 52巻1.2号, 2010, 17-27

[学会発表](計25件)

- ① 福井 義一, 田辺 肇, 解離性体験の主観的側面と解離傾向の関連—青年期アナログ研究—, 日本心理学会第78回大会, 2014/9/10-12, 同志社大学
- ② 福井 義一, 田辺 肇, 西村 麻美, 道満 ゆず子, 包括的な解離傾向尺度の短縮版の作成—青年期アナログ研究—, 日本心理臨床学会第33回秋季大会, 2014/8/23-26, パシフィコ横浜
- ③ 福井 義一, 上田 英一郎, 田辺 肇, 小澤 幸世, 日本語版「医学的に説明のつかない皮膚症状」尺度の作成—精神・身体表現性解離との関連—, 第55回日本心身医学会総会, 2014/6/6-7, 幕張メッセ
- ④ 福井 義一, DES-Tの正しい使い方: 青年期アナログ群の大規模データを用いたデモンストラーション, 日本EMDR学会第9回学術大会, 2014/6/6 ラッセホール(神戸)
- ⑤ 田辺 肇, 後藤 和史, 福井 義一, 徳山 美知代, 日本語版 DES (Dissociative Experiences Scale) による解離性把握の拡張, 日本トラウマティック・ストレス学会第13回大会, 2014/5/17-18, ホテル福島グリーンパレス
- ⑥ 福井 義一, 田辺 肇, 西村 麻美, 道満 ゆず子, 包括的な解離傾向尺度作成の試み—再検査信頼性の検討—, 日本トラウマティック・ストレス学会第13回大会, 2014/5/17-18, ホテル福島グリーンパレス
- ⑦ Hajime Tanabe, Kazufumi Gotow, Yoshikazu Fukui, Michiyo Tokuyama, Dissociation and structure of trauma history measured by the CATS (Child Abuse and Trauma Scale) Japanese version: Reanalysis using nine datasets of college-age samples,

- European Society for Trauma and Dissociation 2014 Conference, 2014/3/27-29, Copenhagen in Denmark
- ⑧ Yoshikazu Fukui & Hajime Tanabe, Development of a scale for measuring the subjective aspects of dissociative experiences, European Society for Trauma and Dissociation 2014 Conference, 2014/3/27-29, Copenhagen in Denmark
- ⑨ 福井 義一, 小原 宏基, 催眠期待と解離傾向が催眠への肯定的態度に及ぼす影響—青年期アナログ群における調整モデルの検討—, 日本催眠医学心理学会第 59 回大会, 2013/9/14-16, 飛騨高山
- ⑩ 福井 義一, 身体感覚異常 (セネストパチー) と解離傾向の関連—青年期アナログ群における調査研究—, 日本心理臨床学会第 32 回秋季大会, 2013/8/25-28 パシフィコ横浜
- ⑪ 福井 義一, 牧野日出香, 不破 崇晴, 宮本 邦雄, 不安感受性と虐待的養育環境, 解離傾向, 脱中心化が不安障害傾向に及ぼす影響, 第 13 回日本認知療法学会, 2013/8/25-28 パシフィコ横浜
- ⑫ 福井 義一, 岡崎 剛, 大学生アナログ群における解離のロールシャッハ指標の探求 2—Klopper 法により主要反応と附加反応を別々に記号化した探索的検討—, 日本ロールシャッハ学会第 16 回大会, 2012/11/3-4 明治大学
- ⑬ 田辺 肇, 後藤 和史・福井 義一・小澤 幸世・澤 たか子・青木 佐奈枝・大饗 広之・野村 早也佳・山下 由紀子, 日本語版 CATS (Child Abuse and Trauma Scale) で捉えられるトラウマと精神表現性・身体表現性解離—7 つの青年サンプルデータセットを用いた再分析—, 日本催眠医学心理学会第 58 回大会, 2012/11/3-5, 武蔵野大学
- ⑭ 福井 義一, 青年期における解離の主観的体験と解離傾向の関連—気配過敏感症状を捉える尺度の作成とその信頼性・妥当性の検討—, 日本心理臨床学会第 31 回秋季大会, 2012/9/14-16, 愛知学院大学
- ⑮ 福井 義一, 宮本 邦雄, 牧野日出香, 不破 崇晴, 虐待的養育環境と不安感受性が解離傾向に及ぼす影響—青年期アナログ群を対象として—, 日本心理学会第 76 回大会, 2012/9/11-13, 専修大学
- ⑯ 山下 由紀子, 野村 早也佳, 福井 義一, 小澤 幸世, 田辺 肇, 虐待のタイプと成人愛着スタイル, 心身の解離傾向の関連—アナログ研究の観点から—, 日本トラウマティック・ストレス学会第 11 回大会, 2012/6/9-10, 久留米大学
- ⑰ 上田英一郎・福井 義一, 山下 由紀子, 岡崎 剛, シンポジウム「外傷性=解離性スペクトラム—心身症性・身体表現性の皮膚症状に焦点を当てて—」アトピー性皮膚炎患者における心身の解離傾向とロールシャッハ反応, 日本トラウマティック・ストレス学会第 11 回大会, 2012/6/9-10, 久留米大学
- ⑱ 福井 義一・山下 由紀子, 岡崎 剛, シンポジウム「外傷性=解離性スペクトラム—心身症性・身体表現性の皮膚症状に焦点を当てて—」大学生アナログ群における解離のロールシャッハ指標の探求, 日本トラウマティック・ストレス学会第 11 回大会, 2012/6/9-10, 久留米大学
- ⑲ 福井 義一, 青年期における解離の主観的体験と解離性体験の関連—夢見体験との関連から—, 日本トラウマティック・ストレス学会第 11 回大会, 2012/6/9-10, 久留米大学
- ⑳ 福井 義一, 山下 由紀子, 鏡像体験と解離傾向の関連についての探索的研究, 日本健康心理学会第 24 回大会, 2011/9/1-2, 東京家政大学
- ㉑ 福井 義一, 山下 由紀子, 岡崎 剛, 上田英一郎, 青年期アナログ群における解離のロールシャッハ指標, 国際ロールシャッハ及び投射法学会 (ISR) 第 20 回日本大会, 2011/7/16-20, 国立オリンピック記念青少年総合センター
- ㉒ 福井 義一, 田辺 肇, 解離性障害における「自己催眠仮説」の妥当性—正常青年を対象としたアナログ研究の観点から—, 日本催眠医学心理学会第 56 回大会・日本臨床催眠学会第 12 回大会合同学術大会, 2010/10/9-11, 鹿児島大学
- ㉓ 福井 義一, 教育講演: ト라우マ・ケアにおける解離性障害の基礎知識, 日本 EMDR 学会第 5 回大会, 2010/5/14-16, 三宮研修センター (神戸)
- ㉔ 福井 義一, 野村 早也佳, 虐待的養育環境と成人愛着スタイル, 心身の解離傾向の関係—それらの組み合わせが精神的・身体的症状に及ぼす影響, 日本トラウマティック・ストレス学会第 9 回大会, 2010/3/6-7, 神戸国際会議場
- ㉕ 福井 義一, シンポジウム「解離性障害における心理テストの意義」: Dissociative Experiences Scale の臨床的活用とその限界, 日本トラウマティック・ストレス学会第 9 回大会, 2010/3/6-7, 神戸国際会議場

[図書] (計 0 件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

福井 義一 (FUKUI, Yoshikazu)  
甲南大学・文学部・教授  
研究者番号: 20368400

### (2) 研究分担者

田辺 肇 (Tanabe, Hajime)  
静岡大学大学院・人文社会科学研究科・教

授  
研究者番号： 60302361

